

多読授業に向けての基礎的研究(1)

林 剛司*

An Introductory Study on Extensive Reading Class (1)
Takeshi HAYASHI*

キーワード: 和訳先渡し授業、多読、文法訳読、高専らしい英語教育

1. はじめに

日本人は、英語の読み書きはできるが、「聞く」「話す」が苦手である、と一般的には考えられてきた。しかし、実際に TOEFL の日本人受験者の得点を他国の受験者と比較しながら分析すると、日本人は読解や英作文の成績も優れているとは言い難い。

日本の伝統的英語教育方法である「文法訳読」は、「聞く」「話す」力はいうまでもなく、実は「読む」「書く」力も養成していないのではないだろうか。¹

私(筆者)も、これまでに中学校、高等学校、大学、専門学校等で専任、また非常勤教員として幅広い年齢の生徒(学生)たちに英語を教えてきたが、はじめのうちは何の疑問も抱かずに、これまでに自分が教わってきたとおりのやり方(文法訳読を中心に、単語、例文、文法事項など「丸暗記」中心の教育方法)で英語を教えてきた。

一部のいわゆる一流私立高校(東大、京大などの難関大学への進学者が多い学校)の生徒たちは私の授業を「わかりやすい」と評してはくれたが、私自身が授業を楽しく行えたことはほとんどなかった。大学受験用の英文読解テキストや単語の羅列リスト、入試に「よく出る」暗記例文集を使って小テストを繰り返して、「大学に合格したければ、これくらい覚えられなくてどうする!」と恫喝するような授業を行なっている、生徒たちは「大学に合格したい」一心で勉強はするものの、短期記憶にしか訴えかけられないような指導法/学習法には限界がある。結果として、大学に合格したはよいが、その段階で「燃え尽き」てしまい、英語はただ暗記科目、精神的苦痛、できればやりたくないもの、の代名詞となってしまう。そして、大学在学中は、単位だけは取るが、英語ができることの楽しみ、喜びは一切感じられないまま社会に出て

いく。

英語教師としての役割が、生徒たちを大学に合格させることのみであれば、割り切って予備校講師のような授業を展開すればよいのだが、せっかく英語教師となったのだから、生徒たちには英語を好きになってほしいし、できれば英語が得意になってほしいものだ。また、受験(大学入試にせよ、TOEIC や英検などの検定試験にせよ)が終わればそれで英語学習も終わり、というような、英語を将来にわたる便利な「手段」としてではなく、ただ単に「目的」としてしか勉強できないような生徒しか育てられないのなら、私は「英語教師」などつまらない職業には従事しなかったはずだ。

2006年4月に沼津工業高等専門学校(以下「本校」と表記)に赴任するにあたり、これまで主に高等学校で行ってきた私の授業形式に学生たちがついてきてくれるか、不安だった。高専の場合、高校とは違い、3年後に大学入試を控えているわけではないので、「大学受験」を彼らの動機付けには使えない。やはり高専らしい英語教育を追及していくべきだと考えた。そして、これをきっかけに「原点」に戻ってみることにした。すなわち、なぜ私は英語教師になったか、ということだ。私は学生たちに、まずは英語の楽しさを伝え、英語ができることによつてどのようなキャリア選択が可能か、どのように人生を切り開いていけるか、というようなことを身を持って示したい、と考えるようになった。

学生たちが楽しく、自発的に、そして継続的に取り組める英語学習法、指導法を模索していたときに出会ったのが「多読」であった。とりわけ「SSS式」²多読法に出会い、私のこれまでの英語学習観、英語教育観が大きく変わった。

* 教養科, Division of Liberal Arts

¹ 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEIC と日本人の英語力』(講談社現代新書, 2002年)を参照。² SSSとはStart with Simple Storiesの略で、日本多読学会が提唱する多読法。この多読法を取り入れる中学、高校、高専、大学が全国で増えており、児童英語教室や大学受験予備校、学習塾などにも広がっている。従来不可能であると思われてきた英語初級者でも楽しく始められ、楽しく続けられる非常に効果の高い画期的な多読法である。ウェブサイト <http://www.seg.co.jp/sss/>を参照されたい。

本稿において、まず私がどのようにして多読授業に興味を抱き、本校での授業において多読を行うことにしたかを簡単に紹介したい。また、私の多読授業実践とともに、他校、他教育機関における多読授業の様子を紹介し、多読は「楽しい」ことはいうまでもなく、学習者の英語力向上におおいに有効であることを、さまざまな客観的データを用いて紹介したい。そして、今後いかに多読授業を行っていけばよいか、さまざまな実践報告や私自身が実際に見学・取材した授業をもとに分析、検証したい。

2. 学校英語の問題点＝「量」不足

一英語教師としても、一英語学習者としても、英語力をトータルに向上させるためには大量の英文を「読む」ことがもっとも確実で有効な学習手段だという信念を持ち続けている。

英語が話せるようになりたいと考え、英会話スクールに通うのもよいが、ふだんから英語を「読む」習慣がない者は、残念ながらなかなか話せるようにはならないのである。英語で何か（内容のあること）を話したいと思うとき、それなりの情報が頭に入っていないと話せないもので、その情報は、さまざまな文献を読むことによって仕入れるのだ。芥川賞作家の平野啓一郎氏は、「読書の面白さの一つは、読んだ本について、他の人とコミュニケーションが取れるということだ」³と述べている。

英語で何かを書きたいと思った場合も、頭の中に何もない状態でいきなり書けるようになるはずはなく、やはりいろいろなものを読んで、内容的にも言語材料的にもさまざまな英文を intake して初めて英語を書いたり話したりすることが可能になる。

「中学校、高等学校の6年間“読み”中心の英語の授業を受けても全く英語が話せるようにならない。やはり学校英語教育は間違っている」という批判をよく耳にする。この批判は、(残念ながら)あながち的外れなものではないと私は考えるが、この批判に潜む「盲点」は、読む英語の「量」をほとんど考察していないのではないか、ということである。

「量」に関して、金谷憲は次のように述べている。

高校英語授業に足りないもの、それは英語の量である。生徒が触れる英文の分量なのである。英語 I、II 合わせて、多くてもペーパーバック 60 ページほどに

しかならない(『現代英語教育』、「英語教育何でも探偵団」1996年5月号 研究社出版。高校を卒業するまでにでも、ペーパーバック1冊分(大体300ページぐらいが普通)を読む高校生はほとんどいないのではないだろうか。⁴

中学校を英語の基礎導入期と考えるならば、その基礎がある程度定着しているという前提において、高校では英語を大量に頭の中に取り入れ(input, ないしは intake)、その英語を使う機会(output)をできるだけ多く持つことなしに、英語力向上は望めない。

しかし、現実には上述のとおり、高校3年間でペーパーバック1冊にも満たない量の英文を、ゆっくり丁寧に文法訳読式で読んでいく(というよりも解読していく)という授業しか経験しないで、大学に進学したり、社会に出て行く生徒がほとんどではないだろうか。

高校で読む英文の量がこれほど少ないならば、中学校ではさらに少ない量の英語しか読んでいない。金谷憲は、「中学校の文科省検定教科書の本文は3年分合計してもペーパーバック20ページほどにしかならない」⁵と述べている。

生徒たちは、「be 動詞+動詞の過去分詞=受動態」、「have+動詞の過去分詞=現在完了形」、「不定詞の用法は名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法の3用法がある」、「英語には5つの文型があり…」などと文法の規則を詰め込まれても、実例(英文)を少ししか示されないもので、全体像が全くつかめず、曖昧模糊としたまま文法事項(や文法用語)を覚え、単語を丸暗記すれば英語ができるようになる、という幻想を抱くにとどまる(が、実際にはこのようにして苦勞して丸暗記したことが全く生かされず、「中学・高校の英語は無駄だった」という結論に達することになる)。

このような点からも、「多読」は英語習得の上で絶対に必要である、と高校勤務時代にも思っていたのだが、これまでに勤めた学校は本校同様、多読図書が1冊もなく、多読に対する関心も興味も低く、多読図書購入の予算も一切ない。

このように、読む英文の「量」を増やすためには理想的な環境とは言い難い環境の中で、私が多読に変わる授業スタイルを模索する中で、「和訳先渡し授業」についての情報を入手し、高校の授業で取り入れることにした。

³ 平野啓一郎『スロー・リーディングの実践』(PHP新書、2006年) p.36.

⁴ 金谷 憲『和訳先渡し授業の試み』(三省堂、2004年) p.14.

⁵ 金谷 憲、前掲書、同ページ。

3. 和訳先渡し授業

私は、これまで中学校や高校で教えていたとき、文法訳読式に則って、英文一文一文を分析しながら読むことはしないまでも、どちらかと生徒たちと（難しい教科書を）ゆっくり読むような授業（つまり「精読」）を行ってきた。これはこれで悪いやり方だとは思わないが、しかし、文法訳読方式では、読む「量」は明らかに少ない。接する英文の量を増やすにはどうしたらよいか、常に悩んできた。

そこで次に考えたのが「和訳先渡し授業」というものであった。高校の教員時代に、『和訳先渡し授業の試み』（金谷憲・高知県高校授業研究プロジェクトチーム著）を読んで感銘を受け、早速自分の授業でも実施してみたのである。

紙幅の関係上、ここで「和訳先渡し授業」について縷々説明を展開することはできないが、簡単にまとめると、次のようになる。

高校の英語の授業というと、「難しい教科書」の英文を、一文一文日本語に訳しながら読んでいく（「解説」していく）というものが一般的だと思われる。わからない単語はすべて辞書で意味を調べ、構文を分析し、日本語に訳していく。使われている単語や熟語、構文が難しいこともさることながら、ストーリーの内容も、日本語で読んでも簡単には理解できない、というものも往々にしてある。内容が、自然科学、歴史、文化等、興味深い（と教師には思われる）ものであっても、生徒たちは必ずしもそれらの内容に関する背景知識を持っているとは限らない。そこで、生徒たちがストーリーをよりよく理解できるように、教師は背景知識を（板書やプリント、AV機器などを使って）説明する必要もあるかもしれない。

このようにして、苦勞して教科書の英文を読むわりには、生徒の読解力（言うまでもないが英作文、英会話の力や語彙力なども）は思っているほどなかなか上達しないということがよく起こる。

結局、教科書の本文が難しすぎて、理解する（解説する）だけでも相当の時間がかかってしまうのだ。しかも、本文を理解するのに、英語のまま理解しようというのならまだしも、日本語に「訳す」ことによって、つまり日本語を通して理解しているという生徒も多いと考えられる。そのような難しい教科書なので、時間をかけてゆっくり日本語に訳すのだが、それだけでもう「時間ぎれ」となり、その日の授業は終わり、ということになる。そうすると生徒たちの頭の中には「日本語訳」しか入って

おらず（これすら入っていないかもしれないが）、肝心の英語はまったくインプットされていないのではないだろうか。

これだと、もはやこれは英語の授業なのだから何かよくわからない。

英語の授業の最後を、せめて「音読」で締めくくれば、生徒の頭の中に多少は英語が残るかもしれないが、音読もなく、⁶もう一度英文を見直すこともなく（これは、時間の制限があつてできないわけだが）、ただ日本語に訳して終わり、などという授業を繰り返して、生徒たちの英語力向上は望めない。

「和訳先渡し授業」だと、いちいち英文を一文ずつ日本語に訳していく作業はなくなるので、その分の時間を音読なり、リスニング、ディクテーションなどに充てることができる。あるいは、ストーリーの内容に関連した別の読み物を追加で読ませる時間もできるであろうし、文法の練習問題や単語テストをやらないと気が休まらないという先生は、それらに時間を割くこともできる。

私は、ある私立高校で、1年生を対象に、この「和訳先渡し授業」を行い、和訳はほとんどやらずに、英語自体を頭に残すような練習時間を大いに授業に入れたところ、生徒たちの反応は結構良かった。

私は、この「和訳先渡し授業」は、特に難しい教科書を使う授業では有効だと考える。英文そのものが難しい、あるいは、内容が高度である、というような場合に、生徒たちは隅々まで理解しようと思うばかりに、すべての英文を日本語に訳そうとする。しかも、試験に和訳問題が出るという場合には、すべての英文を日本語に訳しただけではまだ不安で、その和訳をすべてノートに書きとめようとする。特に几帳面な生徒は、きれいな字でいいねいにノートに和訳を書き出すが、私はこの作業が無駄なことであるような気がしてならない。この時間を、もっと英文を読む時間に充てるべきである。

そこで、和訳を気にしすぎないために、（特に難しい教科書を使う場合には）和訳先渡し授業は有効である。

しかし、そもそも難しい教科書を使うこと自体が私にはあまり好ましいことには思えない。難しい教科書を無

⁶ 授業中に音読をしないとすれば、それは担当教師が音読の重要性を理解していないか、あるいは理解していても「時間がない」ということも考えられる。1冊の検定教科書を丁寧に日本語訳しながら解説し、文法も説明し、巻末の練習問題も解く、ということをやらなければならぬとすれば、1年間で1学年分の検定教科書を取りあえず終えるのに精一杯である。特に、高専のように英語の授業時間数が普通高校と比べても極めて少ない学校においては、常に時間との戦いである。

理に使う、1回の授業に本文の教行しか進まないような授業をいくら続けていても、生徒たちの頭の中の英語の「貯金」はなかなか増えない。たくさんの英文に出会うことによって、何度も同じ単語が出てきて、単語の使い方を知らず知らずのうちに覚えていくものだし、文法に関しても、概略を説明してもらっただけでは定着せず、やはりたくさんの英文に出会う中で、実際に文法のルールがどのように使われているのかという規則が少しずつわかってくるのである。

よく、中学校の先生の中に、なかなか生徒たちが英語を理解できるようにならないとあって、イライラする人がいるが(私も中学校で教えていたとき、イライラすることが多かったことは確かである)、冷静に考えてみると、これは生徒だけが悪いわけではないという気がしてくる。つまり、薄っぺらい検定教科書を1冊、1年間かけて読んでも、少ない言語材料しか与えられていないのに、英語の「勘」のようなものが身につくはずはない。大量の英語を読む(そして聞く)ことによってのみ、英語とはどういう言語であるかが見えてきて、英語の「勘」が養われるのである。

誤解を避けるために急いで注釈をつけなければならないが、検定教科書自体が悪いといたいのではない。英語の量としては非常に少ないので、もっともっと読まない、英語力はなかなか向上しない、と主張しているのである。

4. 「和訳先渡し授業」授業案

和訳先渡し授業とは、読んで字のごとく、教科書の英文を読み始める前に和訳を学生たちに渡し、和訳を先に読んでもらう、という授業のスタイルである。

「和訳を先に渡す」というと、多くの一般の人々は「そのような学生を甘やかすことをやってもいいのか」と言うだろうし、また多くの英語教師たちは「和訳を先に渡してしまったら、授業中にやることももうないじゃないか」というような反応を示すことが多々ある。

しかしこれは完全な誤解であることを述べなければならない。上述のようなことを言う英語の先生にとっては、英語の授業の最終目標が「教科書を和訳すること」であるから、そのような反応が起きるのであろう。そのような先生方にとっては、英語の授業に「和訳」以外のメニューがまったくない、とも言えるだろう。

和訳だけを行なって授業を終えるなら、学生たちの頭の中には、一生懸命苦勞して訳した日本語が蠢いているかもしれないが、肝心の英語そのものがinputされていな

い可能性が高い。また、和訳を通じて教科書の本文を理解したとしても、理解して終わり、ということであれば、理解した英語を使う(output)ところまでは行かない。

一般的に高校で使われている検定教科書は、多読(あるいは速読)用に作られているのではなく、文法訳読を含む「精読」用に作られている。精読することを前提に作られているため、使われている語彙や文法などが課を進むにつれ難しくなっていく。

このように「ゆっくり、分析しながら」本文を「解説」していく(「読解」ではなく「解説」と呼ぶほうが妥当であろう)必要があるため、和訳をしたり、構文を分析することのみに時間を取られ、実際に教科書の本文を使って音読、リスニング、英作文、語彙の確認、などの「練習」をする時間が取れずに、教科書をただとらええは「終えた」ということだけで、次のレッスンに移っていく…ということを繰り返しても、運用能力が身に付かないことは明白である。

和訳を先渡しすることによって、学生たちを甘やかしたり、学生たちに楽をさせることになる、と考えるとすれば、それもまた英語の授業の最終目標が「教科書を和訳すること」であるという前提に立っていることになる。そうではなく、学生たちは和訳先渡し授業においては常に口や手を動かして「練習」することになるので、むしろ忙しくなるのである。

私が、平均的な検定教科書を使って、高校1年の授業を行なった際の実際の授業案は次の表のとおりである。

局面	時間	英文に目を通す回数	生徒の活動内容	和訳利用度
導入・語彙	2分		プレリーディング 配られた和訳を一気に読む	★ ★ ★
	4分	1回目	ワードハント(1) 教師が言う日本語に相当する英単語を本文中からすばやく探し出し、見つけ次第挙手する	★ ★
内	4分	2回目	センテンスハント	★

容 把 握	分		教師が言う日本語に相当する英文を見つける、上記と同様の活動	★ ★
	15分	3回目	内容理解のためのQ&A 教師が本文の内容に関する質問を5つ言い、その質問に対する答えを含む文に線を引く。 ペアで答え合わせの後、答えがわからない質問についていくつかは教師に再度質問することができる。	★ ★
音 読 ・ 表 現	10分	4回目	要約文の完成 本文を見ながら、ハンドアウトの空欄を埋めて要約文を完成させる。リスニングで答え合わせ。(教科書付属要約文を利用)	★ ★
	10分		音読 作成した要約文の音読。 ① クラス全体のコーラスリーディング ② 個人で音読 (buzz reading) ③ ペアで read & look up と repeating	★
	3分		英問英問 英語の質問に英語で答える。上記Q&Aの活動で下線を引いた文を利用するが、答えの形式をとる。 時間内にできなかった分は宿題	★ ★

以上の「和訳先渡し授業」授業案からもわかるように、従来の文法訳読のみに終始する授業に比べ、学生たちが実際に学習している(学習した)英語を使って「練習」する時間が十分に準備されている。

また、宿題として、私は学生たちには教科書の徹底的な音読と筆写を課している。教科書の英文を「訳すだけ」の学習法では英語が頭の中に染み込むことがなく、運用能力も身に付かないことは既に述べたが、学習した英語をしっかりと input し、intake するためには音読と筆写が有効的であると考えられる。

外国語学習における音読の重要性とその有効性は、言語学者、言語教育者だけではなく、大脳生理学などの分野においても科学的に証明され、さらに研究が進んでいるのだが、このことを詳述する余裕はないので、参考文献を挙げるに留める。⁷

学生たちには教科書の音読と筆写を日々の「習慣」として実行してほしいと願うが、現在本校では1, 2年生は単語テストのための単語帳暗記のために時間を取られるようで、残念ながら音読練習のために時間を割くことができないようである。私個人としては、「短期記憶」にしか訴えかけられないような単語帳の丸暗記よりも、言語を身体に「内在化」することができる(ことが科学的にも証明されている)音読、そして視覚、聴覚、口を使った音読に加えて、さらに手を使って英文を intake する手段である「筆写」を行なう習慣を身につけることを(英語を「長期記憶」に留めるためにも)低学年のうちからやっておくべきだと考えるが。

いずれにせよ、上述の「和訳先渡し授業」授業案は、50分授業(授業開始時に挨拶をしたり出席をとったりする時間を差し引いて、合計48分間)を想定して作成したものである(そして実際に授業案に基づいて授業を行なった)が、本校では90分授業になるので、さらに残った時間で次のレッスンに進むこともできるし、十分な英文のinput量を確保するためにも「多読」を行うこともできる。

5. 多読との出会い

本校学生の多くは、研究論文はもちろんのこと、簡単な技術マニュアルや、高校の英語リーディング教科書程度の文章も含めて、英文を読めず(あるいは読むことに大きな苦痛を感じ)、さらには、英文に対する強い拒否反応さえある状態である。本科の学生のみならず、私が現在授業を担当している専攻科の学生においてもこのことは当てはまるようである。

英文を読むことや、英語自体に強い拒否反応を持つ学生と話し合ってみた結果、本校に入学するまでに受けて

⁷ 川島隆太『「音読」すれば頭がよくなる』(たちばな出版、2003年)、國弘正雄『國弘正雄の英語の学びかた』(たちばな出版、2006年)、土屋澄男『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』(研究社、2004年)、門田修平『シャドーイングと音読の科学』(コスモピア、2007年)、千田潤一『「英語が使える日本人になる」—「音読」こそ英語難民から抜け出す近道だ』(『日本の論点2003』文藝春秋、2003年)などを参照。

きた「文法訳読式」授業を通じて、学生たちは英文を読む際には、わからない単語はすべて英和辞書で意味を確認し、文章を一文ずつ細かく分析し、英文を日本語に訳しながら読むことを求められてきた。英文は常に日本語に訳しながら読むという習慣が身につけてしまったため、英文を読むスピードは概して遅く、そのうえ、彼らにとっては英文を読むことは苦痛以外の何物でもない。

この現状を改善すべく、2006年8月に私は日本多読学会に入会し、同学会が主催している、多読授業に関するセミナーやワークショップにできるだけ参加し、実際に日本の中学校、高校、高専、大学等で行われている多読授業の実践例や情報を収集することにした。

2006年4月に愛知県で開催された日本多読学会主催の多読研究会において、豊田高専の多読授業の実践例を知ることができた。豊田高専は2年以上にわたり、同学会が提唱する多読法を実施し、学生の英語運用能力向上効果をj確認している。同校からは、多読法は、受講生が「英文を読める」と実感でき、楽しんで長期間継続することができ、英語に苦手意識を持つ理工系学生の英語運用能力向上に適している、との報告があった。

その他、高専だけに限って言えば、沖縄、東京、大分、函館、苫小牧、呉などで本格的に多読授業が行われている。⁸ これらの高専は、学校として正式にカリキュラムの中に多読を取り込んでいる、または多読のための予算配分があるということで記したのだが、個人的に授業の中で多読を行っている教員もいるので、そのような例を含めば、多読を行っている高専はかなり増えつつある。日本多読学会の会員の中にも、高専の教員の数が確実に増えてきている。全国の中学校、高校、大学はもとより、学習塾や予備校、児童英語教室などでも多読を導入するところが増えている。

最近では、読賣新聞が「高専の実力」という特集を組んだが、その中で、高専における多読について次のように紹介された。

比較的やさしい英語の読み物を大量に読む「多読法」も広がり始めた。東京高専には、この方法で、TOEICの成績が300点から900点まで上がった学生もいる。

豊田工業高専(愛知県豊田市)の電気・電子システム工学科も2004年度から多読授業を本格導入した。

図書館には多読用の英文図書約7000冊をそろえる。TOEICの平均点が約100点アップという効果を上げ、「英語の苦手意識も消えつつある」と西澤一教授。⁹

本校には、多読用図書が全くないため、私は多読授業をやれずにいた。しかし、日本多読学会に入会したことにより、多読図書を500冊ほど借りられることになり、多読授業実施が可能になった。

多読による英語学習法や指導法の様々な文献を収集し、熟読する中で、日本多読学会の推奨するSSS方式の段階的多読法が最良の学習法・指導法であると感じ、SSS方式に則って多読授業に踏み切ることにした。

古川昭夫・伊藤晶子は多読について、次のように説明している。

辞書を引かずに、わからないところは飛ばしながら外国語の本を読むことを多読といいます。英語力をつけるうえで多読の効果が高いことは知られていましたが、辞書を引かなくてもある程度の本を読める上級者のみ可能な学習法と信じられていました。このため、多読は日本の英語教育の現場ではほとんどふれられないことのない存在でした。

英語学習に効果が高いけれども、敷居の高かった多読法を、

- 1) 非常にやさしい絵本から始める
- 2) 段階別にレベルを上げる
- 3) 多種、多様、大量の本を使う

と改良したのが、SSS(Start with Simple Stories)方式の段階的多読法です。この改良により、英語上級者だけではなく、中学1年終了程度の英語初級者でも十分に効果の高い多読ができるようになったのです。¹⁰

古川、伊藤も述べているように、これまでは「多読」というと、英語上級者のみ可能な学習法と信じられていたため、実際に多読を授業でも自分の英語学習でもやったことがないという英語教師は、多読を授業に取り入れることには消極的(あるいは強固に大反対)であるか、よくても「まずは単語帳で単語を何千語か覚えさせ、学年が進んだら多読を行えばよい」という考え方を持つことが多い。

しかし、SSS方式はそうではなくて、「中学1年終了程

⁸ 各高専の取り組みについては、堀登代彦「苫小牧における英文多読授業の試み(中間報告)」(『苫小牧工業高等専門学校紀要、第42号』2007年)が詳しく紹介している。

⁹ 読賣新聞、2007年3月3日。

¹⁰ 古川昭夫、伊藤晶子(酒井邦秀監修)『100万語多読入門』(コスモピア、2005年)、p.2。

度の英語初級者」も気軽に始められる学習法である。多読は何よりも楽しい。多読用の図書や英米の絵本は、ストーリーや絵で読者を惹きつける。これまでに英語の本を読むことなど考えられなかったくらい英語が苦手な学生でも、1冊の本を読み終えるころには十分な「充実感」を感じ、英語が読める「自信」「楽しさ」「喜び」などを体験する。このことについては、実際に多読授業を体験した学生たちの感想、意見を後に紹介したい。

そして、ただ単に「楽しい」だけではなく、先述のとおり豊田高専や東京高専において、TOEICの点数が上がったというような数値データにおいても、その効果、有効性が確認できる。

6. 私の多読授業

私の多読授業を紹介したい。日本多読学会（SSS英語学習法研究会）から借りている約300冊のGR(Graded Readers=段階別多読用図書)と英語の絵本を教室に持って行き、学生各自が自分の興味、関心、英語力に応じて自分で読みたい本を選び、読んでいく。

日本多読学会が提唱する「多読3原則」に基づいて、毎回の90分授業のうち、20~30分間ほどを多読に充てている。多読3原則とは、次のとおりである。

1. 辞書は引かない(引かなくてもわかる本を読む)
2. 分からないところは飛ばして前へ進む(わかっているところをつなげて読む)
3. つまらなくなったら止める(1、2の原則で楽しく読めない本は読まない)

GRや絵本は、使用する語彙に制限を設けているので、やさしいレベルから順番に読み進めることができる。ジャンルは文学、ミステリー、ノンフィクション、伝記、童話など、さまざまで、ほとんどの読者の興味、関心に応じている。私が毎回用意する300冊の図書の中から、学生たちは、自分のレベルや興味に応じて自由に本を選び、とにかく次から次へと読んでいく。

私のクラスでは、私の予想をはるかに超えるくらい、学生たちは静かに集中して読書に没頭している。学生の中には、授業中だけではなく、本を借りて、家で読む者も増えてきた。

学生たちは、これまでに、洋書を読む習慣がほとんどなかったようである。GRは、やさしい英語で書かれていても洋書であり、1冊読み終えると「達成感」を感じることができ、また次の本に手を伸ばす。シリーズ物は、「ス

トリー」の続きが気になる」「結末はいったいどうなるのだろう?」ということで、いつの間にか多読の魅力に惹きこまれ、楽しみながらも確実に英語の「貯金」(input)は頭の中が増えていくのである。

私の1年生のクラスでは、検定教科書を使って授業を行なっているが、先述のとおり、多読の時間も毎回20~30分間くらいは入れている。6月現在で、某社の検定教科書のLesson1~3まで学習したが、この3課の総語数は985語。多読で、4月~6月の間に一番多く読んだ学生の総語数は30,122語。この学生は教科書しか読んでない学生の30倍の量を読んでいることになる(当然、精読と多読の違いはあるが)。

2007年度の1年生に(多読授業を始めて5ヶ月しか経っていないが)感想を書いてもらった。紙幅の関係ですべては紹介できないが、全員が多読については肯定的に受け止めており、「本文中にわからない単語があっても調べずに読み進めると、話の流れが、絵で予想がつくので、内容が分かり、おもしろい」「多読はとても楽しい。本のシリーズによっては内容がとても面白いものがあった、いつも多読を楽しみにしている」「前よりも文章を読むことに慣れてきたみたいなので、これからも続けていきたい」「初めは多読などで英語の力が身につくのかと心配だったが、多読をやっていくうちに、英語の文を読むのがだんだん楽しくなってきた。これからもたくさん読んでいきたい」というような感想を寄せてくれた。

私が担任するクラスのご父兄からは、「うちの子は、中学のときは英語がクラスで最下位だったのに、“この学校に入って英語が楽しくなってきた!”と言っている」「うちの子が家で英語の本を読んでいるというのが信じられない光景。中学のときは、教科書はおろか、アルファベットを見るのもイヤだ、と言っていた子なのに…」「最近、親子で本屋に行くと、息子は自ら洋書のコーナーに行き、英語の本をパラパラめくって、読んでいる。“どうしたの?英語の本なんか読んで…”と話しかけると、“英語の本が読めるというのが楽しいからね”と答えた。(普段は寮生活なので)久しぶりに帰省した息子が頼もしく思えた」というような感想を寄せていただいた。

私の授業では、「多読記録用紙」を学生たちに配布している。学生たちはこの記録用紙に、読んだ本のタイトル、総語数を書いていく。読後の感想やコメントを書く欄もあるが、これは無理に書く必要はない、と指導している。感想やコメントを書くのに時間を取られて、肝心の読書時間が少なくなるのは避けたいからである。私が授業で使用している多読図書は、先述のとおり日本多読学会から私が借りているものであり、学生に貸出して本が紛失

すると困るので、現在のところ貸出しは行っていない。そのうえ、本校のように図書館に多読用図書が整備されていない環境においては、学生たちは教室内（授業時間内）でのみ多読図書を読むことができる。そこで、多読に関しては理解度チェックのための余計な練習問題や感想文作成などは課さず、できるだけ純粋に多読そのものに集中させている。

多読授業のクラスにおいても、学生たちが読書をした後の理解度を測ったり、読書を推進させることを目的に様々な練習問題（たとえば読んだストーリーの内容や文法事項に関する質疑応答など）を学生たちにやらせないと気が済まない英語教師も多かろう。あるいは、読んだ本のサマリー（要約）を書かせることによって「本当に読んで理解できたのか」を確かめたくもなろう。しかし、Mason や Krashen は、読書後にサマリーを書かせることは、英語力向上には直接影響しないという結果を発表している。¹¹

7. 多読の全国的な広がり

日本多読学会初代会長の酒井邦秀は、「100万語多読」を提唱し、¹² 『英語教育』誌（大修館書店）が2004年2月号において100万語多読の特集を掲載したことにより、全国の英語教師に多読が知られるようになった。

酒井は長年にわたり多読指導をした経験から100万語という数値を出したようであるが、これは（酒井が意識したわけではなかったであろうが）アメリカの中流クラスの子どもの達が1年間に読む単語の数である、とAndersonらが述べている。¹³

多読に関する著書や雑誌なども増えており、¹⁴ 先述の

とおり高専の間では英語科のみならず、専門学科の教員が多読に興味を示し、実際に授業に取り入れる学校も増えている。

私の多読授業における学生たちの感想は先述のとおりだが、私の多読授業は2006年度に始まったばかりで、まだその成果を発表するまでには至っていない。

そこで、ここで他校の多読授業について紹介したい。2003年度から多読授業を行っている田澤美加（明治学院高校）は、多読授業の中で記した生徒たちの感想を次のように紹介している。

- ・辞書を引かないで読むことに最初は戸惑ったけれど、ある本でわからなかった単語が、他の本を読むうちに自然とわかるようになって嬉しい。マジックのようです。こんなことで単語って覚える……ってより身につくんだなあ！！と感動です！
- ・新しい単語は覚えられないかなあ、と欲しかったけれど、1冊の本の中に何度もその単語が出てくると、その意味がわかってくるのでそれはよかった。
- ・長文を読むときにわからない単語が出てきても、文脈から判断する練習になると思いました。
- ・予想していたより楽しく読めています。自分のペースで、読みたい本を読めるのが飽きっぽい私でも続けられる理由だと思っています。1冊読み終わると、次に何を讀もうか考えるのが楽しくなってきました。¹⁵

同稿の中で田澤は、さらに最終授業アンケートで生徒達が「英文を読むスピードが速くなった」「英文への恐怖心がなくなった」と答えていることを紹介している。

8. 今後の課題

豊田、沖縄、東京の各高専のように、図書館に多読図書を揃えることが、多読学習を成功に導く鍵である。豊

秀の多読授業への招待」という連載を掲載している。

¹⁵ 田澤美加「先生と生徒とともに100万語多読を」『教室で読む英語100万語 多読授業のすすめ』（酒井邦秀、神田みなみ・編著、大修館書店、2005年）、p.79。なお、同書は、高校、高専、大学、学習塾、児童英語教室、社会人英語教室等、多種多様な教室における多読授業の実践報告を紹介している。

¹¹ Mason, B., & Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. *System*, 25 (1), pp.99-102.

¹² 酒井邦秀『快読100万語！ペーパーバックへの道』（ちくま学芸文庫、2002年）を参照されたい。多読の普及を目指し、2002年度よりSSS英語学習法研究会が全国各地でワークショップや講演会を開催してきた。さらなる多読の普及をはかるため、2004年4月、日本多読学会が設立された。

¹³ Anderson, R., P. Wilson, & L. Fielding. (1988). Growth in reading and how children spend their time outside of school. *Reading Research Quarterly* 23, pp.285-303.

¹⁴ 『Active English』（アルク）という一般英語学習者向け雑誌では、2005年4月号から「100万語多読」特別連載が始まっている。コスモピアは、2006年9月に『多読多読マガジン』というCD付きの雑誌を発刊し、2007年9月までに5巻まで発刊されている。また、英語教育関係者向けの雑誌『英語教育』（大修館書店）は、2004年7月号から9月号にかけて、酒井邦秀執筆による「酒井邦

田、沖縄の両高専は、図書館に8000冊を超える多読図書、および「多聴」用CDを用意し、学生、教職員にはもちろんのこと、外部の一般利用者にも貸出している。

図書は、コンピュータやマルチメディアなどと違い故障するものでもなければ、大掛かりな（そしてコストのかかる）メンテナンスを必要とするものでもない。何十年でも使えるものである。

また——これは多読の本質からはややずれるが——多読図書を設置したことによって、図書館の貸出し件数が急増した、という報告もある。豊田高専の西澤一は次のように述べている。

多読授業は、学生の図書館利用も活性化させました。長期低落傾向にあった図書館の年間館外貸出し件数（本校学生）は、平成15年度から反転急増し、平成17年度には14年度の2倍を超えました。また、電気・電子システム工学科では、多読用以外の図書貸出数も減少が止まり、多読授業で来館した学生が、その他の図書も利用し始めている様子が伺えます。¹⁶

本校の場合は、本科1,2年生の英語の授業では検定教科書を使用しているため、教科書による授業もしっかりやらなければならないとなると（それに加えて単語テストなどもあるので）、授業時間内だけで多読をやるのは難しい。また、多読によって「自分にも英文が読める」という自信が持てるようになった学生には、「継続は力なり」ではないが、家庭でも多読を行う習慣を身につけて欲しいし、図書を借りて自分でどんどん読んでいく「学習者中心の(learners-centered)」自立した学習者になることが、多読の成否をおおいに左右すると考える。

そのためにも、本校の図書館にも多読図書が設置されることが望ましい。現在本校の図書館に設置されている多読図書は、私自身の個人研究費、学生による「ブックハンター」制度などによって購入したものであり、学校からは何の予算も配分されていない。

これだけ多くの学校や教育機関で——就中「高専」において——多読が浸透し、また成果を挙げている理由は次の5点に集約できるのではないかと私は分析している。

1. 高専らしい英語教育を迫及した結果
2. 理工系の学生に多い、いわゆる「英語嫌い」な者にも始められること
3. これまでの「丸暗記」学習に代わる「楽しい」学

習法で、自信が持てること

4. 楽しいだけではなく、TOEIC や BACE¹⁷などの試験においても多読の成果が表れやすいこと
5. 大学受験が終わればもう終わり、の「短期記憶」型学習法ではなく、「長期記憶」型であり、高専を卒業してからも自分のペースで継続が可能であること

次稿において、以上の5点の項目に言及しつつ、本校（本校では私が初めて多読を授業に導入してからまだ日が浅いので、現在のところ大した客観的データは提供できないが）や他機関における多読の成果を、これまでに公に発表されているデータも用いながら紹介したい。

<多読授業に向けての基礎的研究(2)に続く>

参考文献（脚注内に挙げたものは除く）

- [1] 酒井邦秀『どうして英語が使えない? 「学校英語」につける薬』ちくま学芸文庫、1996年。
- [2] 林 剛司『英語は「多読」中心でうまくいく!』ごま書房、2006年。
- [3] 林 剛司「多読と英語教育について」『STEP 英語情報9・10月号』日本英語検定協会、2007年。
- [4] 林 剛司「多読で learners-centered な授業を」『新英語教育 11月号』三友社出版、2007年。
- [5] 古川昭夫・河手真理子『今日から読みます 英語100万語』日本実業出版社、2003年。
- [6] 古川昭夫・伊藤晶子『親子で始める英語100万語』日本実業出版社、2004年。
- [7] Aebbersold, Jo. Ann. & Field, Mary. Lee. *From Reader to Reading Teacher: Issues and strategies for second language classrooms.* Cambridge University Press, 1997.
- [8] Bamford, Julian. & Day, Richard R. *Extensive Reading in the Second Language Classroom.* Cambridge University Press, 1998.
- [9] Bamford, Julian. & Day, Richard R. *Extensive Reading Activities for Teaching Language.* Cambridge University Press, 2004.

¹⁷ BACE は、英語運用能力評価協会 (ELPA) が主催する、高校1年生 (入学時) 対象の300点満点のTOEIC形式 (英問英答記号式) の英語力判定試験。本校においても4月に新入生 (本科1年生) を対象に実施している。また、同協会主催のテストにACE というものもあり、これはBACE よりもややレベルが高い試験である。BACE、ACE 共に、問題は語彙・文法、リスニング、リーディングの3つのパートで構成され、主に中学、高校の学習事項の中から出題される。結果はIRT (項目応答理論) 分析に基づいたスコアで表される。問題はすべてマークシート形式。

¹⁶ 「愛知図書館協会会報」第178号、2006年、p.6。